

**文部科学省の統計教育大学間連携ネットワーク主催のシンポジウム  
『論より統計！ 社会が求める人材になるために』  
今回のテーマ「データサイエンスが社会の課題を解決する」  
10月17日、午後1時半から立川の統計数理研究所にて開催**



120名を超える参加者を得て、賑やかなシンポジウムとなりました



10月17日(土)午後1時半からJR立川駅近郊の立川総合研究棟の統計数理研究所大会議室で、大学間連携共同教育推進事業「データに基づく課題解決型人材育成に資する統計教育質保証」統計教育大学間連携ネットワーク(JINSE)主催シンポジウム『論より統計！ データサイエンスが社会の課題を解決する』がありました。

統計教育大学間連携ネットワークは文部科学省大学改革推進等補助金事業で東京大学、大阪大学、総合研究大学院大学、青山学院大学、多摩大学、立教大学、早稲田大学、同志社大学が連携しています。

今回のシンポジウムは応用統計学会、日本計算機統計学会、日本計量生物学会、日本行動計量学会、日本統計学会、日本分類学会など学会が連携、内閣府、総務省、統計関連学会連合の後援で開催されました。

初めに、会場提供元でもある統計数理研究所の樋口所長が開会挨拶、統計数理研究所とデータ活用に関する提携を行った立川市の清水市長が歓迎の挨拶を行い、早速第1部は多摩大学の今泉教授の司会で「統計を活用したこれからの行政～市民生活を豊かにするデータ～」をテーマに会津若松市の室井市長が講演しました。

第2部は成蹊大学の岩崎教授の司会で、総務省統計局の阿向課長、NTTドコモの石井課長、国立天文台の大石データセンター長、ニッセイ基礎研究所の榎専務理事をパネリストに『データサイエンス力とは何か?』をテーマにパネルディスカッションが行われ、予定時間を大幅に超過した午後5時半過ぎ、統計数理研究所の副所長で総合研究大学院大学の田村教授の閉会挨拶で無事終了しました。

# 『論より統計！ データサイエンスが社会の課題を解決する』シンポジウム



生活の質を高めるためにデータの活用をと 統計数理研究所の樋口所長

最初に会場提供元となった統計数理研究所（正式名称大学共同利用機関法人情報システム研究機構統計数理研究所）の樋口所長が開会の挨拶に立ちました。

統計数理研究所の中には総合研究大学院大学の統計科学専攻が設置されており、研究所の職員はその教員も兼務しています。

シンポジウムを主催するJINSSE（Japanese Inter-university Network for Statistical Education）は文部科学省の大学改革推進等補助金大学間連携共同教育推進事業の一環として平成24年度採択「データに基づく課題解決型人材育成に資する統計教育質保証」、長いためJINSSEと呼んでいます。

本日のテーマ「論より統計！ データサイエンスが社会の課題を解決する」は一昨年の“ビッグデータ”、昨年の“統計学”、今年は“人工知能”と言った言葉が多くメディアに登場していますが、私たちが生活の質を高めるためには“データ”を適切に活用できる能力を身に付けていることが必要であり、その本質が広く理解されているものと確信しています。

基調講演では地方自治体の事例として会津若松市の室井市長にご登壇頂きますが、自治体が直面する諸問題の解決のためにどのようにデータを活用し、効果を上げているか好事例をご紹介します。

本研究所も自治体へのデータの活用を目的に立川市と協定を結び、市職員のデータサイエンス力の育成にご協力することになり、そのご縁で清水市長にも本日ご多忙の中、ご挨拶を賜ることになりました。

「清水市長よろしく申し上げます」と開会挨拶を行いました。



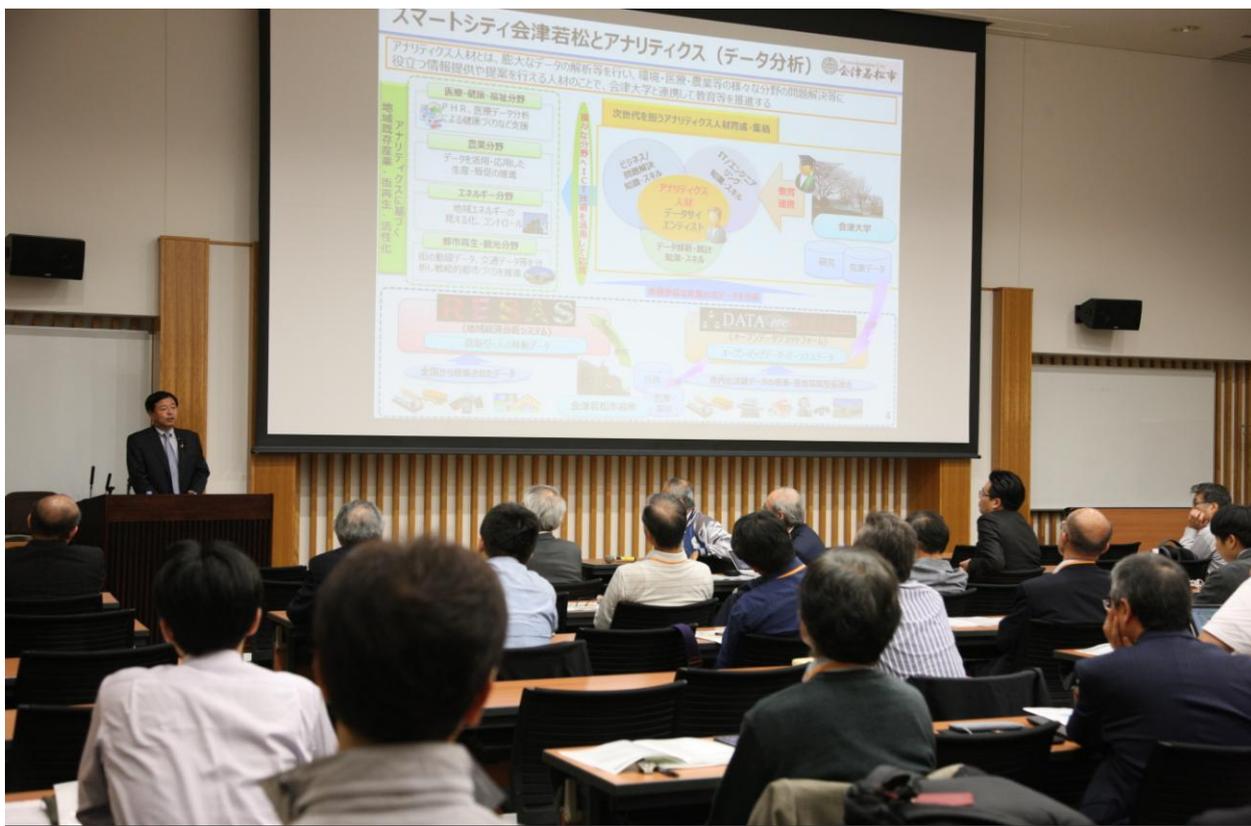
データを市民サービスに活用したいと 立川市の清水市長

続いて登壇した立川市の清水市長、地方自治体が保有する膨大なデータをどう活かすか、総務省がデータを活かすと“言うは易し、行うは難し”で自治体としては活用法についてのノウハウに乏しいこともあり、立川市内の統計数理研究所の知恵を拝借し、職員のデータサイエンス力の向上、データ活用法についての指導を仰ぐべく、今年9月に協定を結び、職員のデータに関する知識を強化、活発にデータ活用法などの議論を交わし、普及拡大に努めているとのこと。



この日は市民の皆さんに“データ”に関心を持って頂くため、市行事と統計数理研究所が連携してのスタンプラリーも実施するなど、データを市政に活用することで一層のサービスの向上に取り組むたいと挨拶を頂きました。

# 基調講演『統計を活用したこれからの行政～市民生活を豊かにするデータ～』



会津若松市を日本国内でも最先端の“スマートシティ”に変身させたと室井市長



第1部の司会  
は 今泉教授



スマートシティを推進して大きな成果を上げ  
自信に満ちた講演の会津若松市・室井市長



室井市長が知恵袋と  
紹介した村井さん

開会挨拶が終わるとJINSSEのメンバーでもある多摩大学の今泉教授の司会で第1部の基調講演「統計を活用したこれからの行政～市民生活を豊かにするデータ～」に入りました。

民間企業に勤務経験がある会津若松市の室井市長、最初に会津若松市の概要を紹介した後、任期2期目に入った市長が就任以来行ってきた「スマートシティ構想」について講演しました。

福島県会津若松市は福島県西部、会津地域の中核都市の一つ、猪苗代湖や周囲を磐梯山などの山に囲まれた盆地にあり、太平洋岸の平市と新潟市とのほぼ中間地点にあり、ご他聞に洩れず少子化や高齢化問題に直面しています。

平成5年、“悲願”4年制の会津大学、情報社会の一翼を担うべく、日本初のICT専門大学を開校しました。

ソフト/ハードウェア双方のICT教育を実施すべく教師の半数が外国人、3、4年制は英語での授業を行うなど国際化への対応、情報系企業の誘致、関連企業集積のためのオフィス環境の整備、卒業生の定着などの行政に取り組みました。

並行してICTを駆使した行政サービスを具体化し、GIS (Geographic Information System: 地理情報システム) と人口データを活用した空家対策、市内バスの路線最適化、事故発生可能性地域の抽出、データ分析に基づくリコメンドサービス実施などスマートシティの実現に取り組み、大きな成果を上げた事例を紹介頂きました。少子高齢化、グローバル化、高度情報化教育など、地方再生を目指す現政権の先を行く行政手法を紹介頂き、会場からは地方再生大臣を指導してはとの声も出ました。

# パネルディスカッション『データサイエンス力とは何か？』



第2部は『データサイエンス力とは何か？』をテーマに、成蹊大学の岩崎教授がリーダーを務め、パネルディスカッションが行われました。

最初に4名のパネリストを紹介し、各パネリストがそれぞれ専門的な立場で「データサイエンス力」についてのプレゼンテーションを行いました。



総務省統計局のデータサイエンス力向上プロジェクト



最初は総務省統計局統計情報システム課の阿向課長が「データ・ドリブンモデルの中で捉える公共データのオープン化とデータサイエンスの重要性」をテーマに総務省が取り組むデータ活用について紹介しました。



企業でのビッグデータの活用と人材について説明



2人目はNTTドコモのサービスイノベーション部ビッグデータ担当課の石井課長が「ビッグデータ活用における人材とは？」をテーマに企業内での経験に基づくデータサイエンスを扱う人材について紹介しました。

# パネルディスカッション『データサイエンスとは何か？』



天文データは想像を絶するビッグデータの典型……



幅広い経験からデータサイエンスでは広い視野が必要と……



3人目は国立天文台天文データセンターの大石センター長。膨大な天文データを海外の天文台との間でやり取りするなど、宇宙に存在する物質の化学、世界中の天文台と高速ネットワークで統合するなどの話を紹介頂きました。



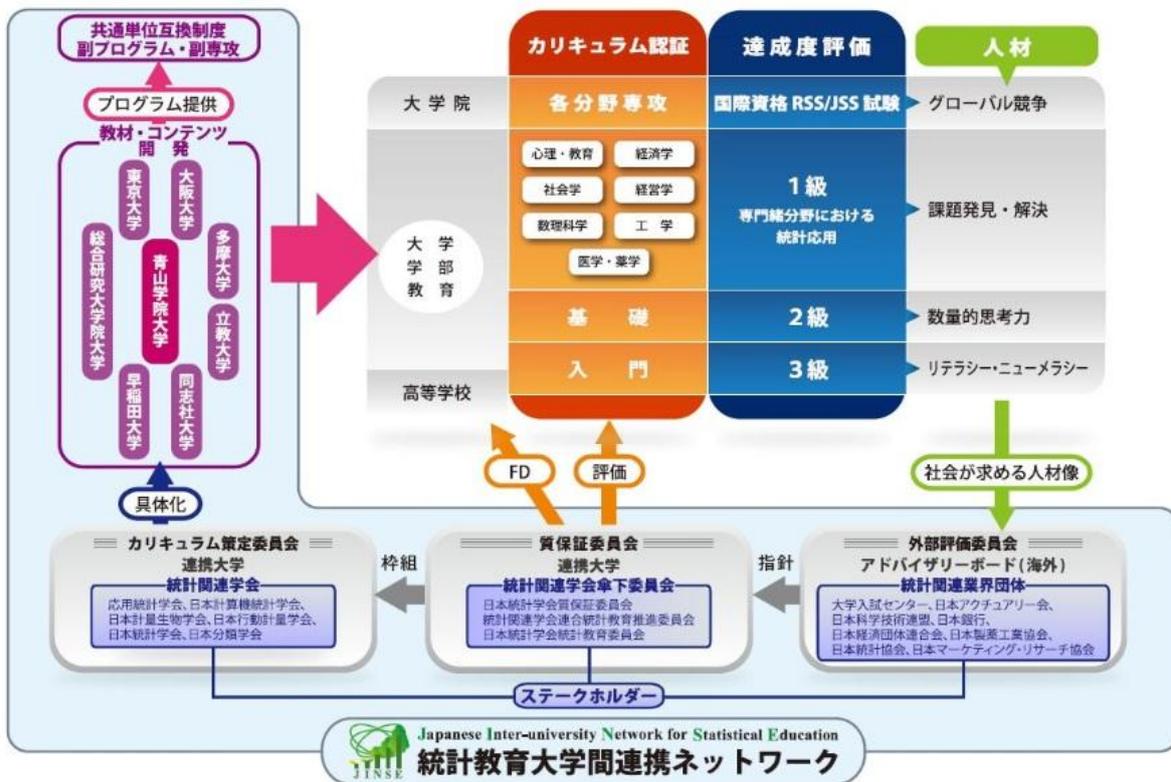
最後はニッセイ基礎研究所専務理事の樋先生。経済企画庁などの勤務を経て現職、エコノミストとしての経験から大学教育での在り方やビッグデータの取組み、そのための人材について紹介頂きました。



パネリストの先生方の説明の後、早速司会の岩崎先生が各パネリストに大学教育におけるデータサイエンスのためのカリキュラムなどについて意見を求める等、ディスカッションを仕掛けます。

議論が終わったところで会場内の参加者から次々に質問が寄せられ、活発な質疑応答が行われました。

統計教育高度化質保証 PDCA サイクル



立川市長の挨拶にもあった研究所の一般への開放デーの様様



午後1時半にスタートしたJINSEシンポジウムは、会津若松市の室井市長による行政分野でのデータサイエンスに始まり、企業で求められる統計能力まで幅広く、議論百出、午後5時の終了予定時間を大幅に超過し、午後5時半過ぎ、統計数理研究所の田村副所長の閉会挨拶「私は物理出身ですが、もうちょっと統計を勉強しておくんだった」とのコメントで終了となりました。